

画期的だった 「スペシャリストへの道」

1970年代という古い話になるが、大学進学者の増加に伴う普通高校志向の高まりの中で、農・工・商業といった専門高校（かつての職業高校）が、理不尽にも高校の序列化の中に組み込まれていった。「普通高校と商業高校はどちらが優れているのか」というのは、「剣道と柔道はどちらが強いか」と同じくらい愚問のはずだが、大学進学の手やすさというただ一点の尺度が、高校における専門教育を一段低い場所に追いやることになってしまった。

国公立の場合共通一次が加わり、専門高校からの大学進学は、ますます難しいものとなった。高校の目的は、「普通教育および専門教育を施す」ことであるが、大学が入試で課す科目の大半は、普通教育に該当する科目である。専門高校をこの筋違いの序列から解放するためには、専門教育とその成果を正当に扱うことが必要となるが、そのような雰囲気醸成は、1990年代まで待たなければならなかった。

無論当時も、例えば推薦入試の積極的な活用といった文部省の提言に沿って、専門高校と大学との接続を改善しようとする動きがないわけではなかった。しかし、1995年に示された文部省の「職業教育の活性化方策に関する調査研究会議」の報告「スペシャリストへの道」の影響はやはり大きかった。この報告は、職業高校を専門高校と呼び改めるとともに、専門高校の生徒を対象とする推薦入学の拡大や特別選抜の導入等を求めるものだった。

進学率は 頭打ちから減少へ

この報告を受け1990年代後半、大学が専門高校の生徒の特別枠を設け、専門科目での受験を認める動きが広まる。そして実際に、専門高校から大

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター准教授

③ だれがスペシャリストへの道をふさぐのか？

曇りのち晴れの アドミッションな日々



学・短大への進学率は順調に上昇していった。特に商業高校では顕著で、1990年代初頭には10%に満たなかった進学率は2000年代直前には20%に迫るまでに至る。ある商業高校の校長先生は1996年の『進路の手引』巻頭言で、「はっきり云って追い風です」と述べていたが、実際そうだった。

そして私も、普通高校に引けを取らない進学実績を挙げている商業高校などを訪問する中で、専門高校からの大学進学率はこの後もある程度伸びてゆくのではないかと予想していた。

だが調べてみるとここ10年間で専門高校からの進学率は頭打ちとなっている。2000年代に入りまもなく、農業・工業高校は16%前後で停滞気味となり、2011年以降は減少している。ひとり商業高校からの進学率が伸び続

けるものの、こちらも2010年の28%をピークに落ち込みに転じている。

不況といった経済的理由も絡んでいるのだろうが、学力の不足や低下を理由にAOや推薦入試が見直される中で、そのあおりを受けて専門高校からの進学ルートが狭められる傾向にあるのではないかと、私は推測している。中には、はっきりと専門高校特別枠を廃止する大学も見られるからである。

高校3年、大学4年の 7年間をグロスで捉える

大学にとって、専門高校出身者の学力に対する懸念はあろう。しかし、専門科目を学んでいればその分、普通科目の学修時間は少なくなって当然であり、そうした学習履歴の違いが前提とされなければならない。「勉強していないこと」と、「勉強できないこと」はしばしば混同されるが、学習履歴の凸凹の凹を、大学が学力不足と捉えてしまうと、専門高校からの進学は極めて困難になってしまう。

不思議なことに、例えば商学部では、簿記会計を初めて学ぶ学生に対しこれを喜んで教えるが、逆に簿記会計を高校時代に習得したが、英語や数学の学修時間が不足している学生に対してはときに冷淡である。未習という点では同じはずなのに、片方は大学における専門教育として施し、もう片方は補習と呼び本務とは捉えない。

双方とも高校3年、大学4年のトータル7年間で学ぶ内容をそろえるための教育なのだと考え、大学教育の中に位置付けることはできないか。それには、単に高校に準備を求め、それを引き継ぐというだけではなく、大学の出口で7年間の高大教育を仕上げたあげるのであるという姿勢が必要となる。

最近あるシンポで大学関係者が「大学の予科である高校…」と発言していた。スペシャリストへの道をふさいでいるのは、こういう発想だと思う。